

小熊 英二著

社会と人間、ゼロから探る

気鋭の社会学者が「予備知識ゼロ」で挑んだインド滞在記。

学中国・日本研究科客員教授。

未知の世界につきもののトラブルや七転八倒はほとんどなし。

それでも読ませるのは、エネルギー・ギッシュに動き回る著者が「思考」をはぐくんでいく過程を間近に見る思いがするからか。

与えられた仕事は、デリーランドで挑んだインド滞在記。

日本に送った日記を、ほとんど手を加えず本書にまとめた。

元々出無精で、途上国は初めて。

到着直後は見るもの触れるも

のに過敏に反応する。慣れてく

出版社勤務の経験がある。自分

分に距離を置き、複眼思考を保

つ秘けつは編集者としての眼力なのかも知れない。(新曜社)



(おぐま・えいじ) 62年東京生まれ。慶應大学助教授。著書に『単一民族神話の起源』『〈日本人〉の境界』など。

「観察が妥当かどうかは知らない。一人の人間がものの見方を形成していく運動の感覚を記録するおもしろみが伝わればいい」。「今となっては一度と書けない種類の文章」には著者の素直さがさらけだされている。

国民が自國をどう認識してきたかという重いテーマに取り組んできた。膨大な資料の読み直しを通じ、「日本は単一民族国家」といった、当然とされてきた常識を覆し、評価を得た。今回旅でも、インドの知識人に突然、「ヒンドウって何ですか?」と質問を投げかけた。ちやかしたり、既成観念を壊すの

が目的ではない。「社会と人間のありようをゼロから考えてみたい」だけなのだという。

出版社勤務の経験がある。自分が目的ではない。「社会と人間のありようをゼロから考えてみたい」だけなのだという。

出版勤務の絏験がある。自分

分に距離を置き、複眼思考を保

つ秘けつは編集者としての眼力なのかも知れない。(新曜社)

二ヵ月間、毎夜電子メールで

子供たちの踊りの輪に加わる。

二、七〇〇円)